

資料

学生の精神看護学への関心に影響する実習での 教員の接し方と学びの現状

Lecturers' involvement effects for students' interest in psychiatric nursing at the practice, and the current state of learning

川村晃右¹⁾ 十倉絵美¹⁾ 井上喬太²⁾ 小西奈美¹⁾ 松本賢哉¹⁾
Kosuke Kawamura Emi Tokura Kyota Inoue Nami Konishi Kenya Matsumoto

キーワード：精神看護学への関心、教員の接し方、精神看護学実習での学び、重回帰分析
テキストマイニング

Key words : interest in psychiatric nursing, lecturers' involvement, learning in psychiatric nursing
practice, multiple regression analysis, text-mining method

要旨

目的：学生の精神看護学への関心に影響する実習での教員の接し方と実習による学びの現状を明らかにすることを目的とした。

方法：精神看護学実習を終えた3年生66名を対象に質問紙調査を行った。精神看護学への関心に影響する実習での教員の接し方(26項目)については重回帰分析で、学びのレポートについてはテキストマイニングで分析した。

結果：精神看護学への関心は「皆さんが緊張している時には、リラックスさせるようにしていた」($\beta = 0.53, p < .05$)、「指導者との指導方法は統一していた」($\beta = 0.49, p < .05$)などが正に、「皆さんのカンファレンスや計画の発表をうまく運営していた」($\beta = -0.69, p < .01$)が負に影響する変数であった。学びのレポートで、出現頻度が高かった語は〈患者〉であった。〈生活〉の中心性(媒介)が高く、〈患者〉〈精神〉〈思い〉〈考える〉などと共起関係にあった。

考察：学生の緊張を緩和させることは、患者との関係性を発展させ、精神看護学への関心、学習の向上につながる事が考えられた。カンファレンスの準備に教員が関わると、主体的に学びを深めたという実感を弱めるが、考察を深める姿勢の修得につながる事が推察された。

I. 緒言

多くの学生は、精神障害者との関わりの経験が少なく、精神疾患のイメージがもてないため、精神看護学実習の前には不安などの否定的な思いをもっている(石田, 2012)。その否定的な思いは患者へのケアに関する内発的な動機付けを阻害し

(松枝・安永・安田・大見, 2008)、さらには精神看護学実習における学びを狭めてしまうおそれがある。

そのため、実習を担当する教員は、実習の初期から学生の患者に抱く否定的な思いが変容するように支援する必要がある。教員の支援を受けなが

1) 京都橘大学 看護学部 看護学科 Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kyoto Tachibana University

2) 湘南医療大学 保健医療学部 看護学科 Department of Nursing, Faculty of Medical Sciences, Shonan University of Medical Sciences

ら患者と向き合うことで、患者との関係構築の基礎を学ぶとともに（高橋・片岡，2005）、精神疾患に対するイメージも肯定的に変容するとされている（小坂・文，2011）。そして、精神看護学への関心の向上などにより、患者へのケアに関する内発的な動機付けが高まるといわれる（松枝・坂田・宮崎・安藤・安永・宮野，2018）。関心の向上などにより内発的な動機付けが高められることは、実習での主体性に影響するため、学びの充実化につながる可能性がある」と推察される。

実習に関しては、学習成果として学びに焦点が当たった研究が多く、精神看護学への関心が高まるような支援や学びといった両視点から検討されたものは少ない。また、教員と指導者は相補的に指導しているが、教育的な支援内容には特色がある（渡邊・小高・原田，2016）。精神看護学への関心を高める臨床指導者の学生への接し方については、受容的な態度や良好な関係性の保持などが明らかになっているが（井上・西田・平井・松本，2016）、精神看護学への関心を高める教員の接し方についての報告はみられない。

そこで、本研究では学生が精神看護学への関心に影響する実習での教員の接し方と、実習による学びの現状を明らかにすることを目的とした。これらの結果は、学生が精神看護学への関心を向上させ、学びの充実化につなげるための指導の在り方を検討するための資料となり得ると考えられる。

Ⅱ. A大学の精神看護学実習の概要

1. 実習目的

患者とのかかわりを通して、個人およびその家族への理解を深める。さらに、生活や対人関係に困難を抱えていることを理解し、自らをケアの道具として最大限に活かし、患者と関わるための基礎的実践能力を養う。

2. 実習目標

実習目標には、大きく以下の4項目を挙げている。

- 1) 患者を身体的、心理的、社会的な存在として理解する。

- 2) 援助的な対人関係の基本的能力を修得する。
- 3) 患者のセルフケア能力のアセスメントに焦点をあてて、長期的視点に立った看護過程を展開する。
- 4) 精神保健医療福祉における多職種との協働について考え、看護職の役割と地域生活支援のあり方を学ぶ。

なお、それぞれ下位項目を挙げている。

3. 実習指導の方針と方法

実習目的および実習目標をもとに、患者に入院が必要となっている状況について、現在の精神症状をアセスメントすることに加え、これまでの経験がどのように影響しているのか、学生が疑問をもち、主体的に考察できるよう指導している。患者との一場面について、プロセスレコードで客観的に出来事や自身の患者への関わりの傾向を振り返ることができるようにしている。また、入院生活上の支援に留まらず、今後の地域生活に向けてどのような援助が必要かという長期的視点に基づいて看護展開を行い、協働における看護師の役割についても学びが深まるように指導している。なお、実習中、教員は常に実習病棟で、患者や学生の言動を客観的に振り返るよう促したり、学生の気づきに対しては支持的に関わったりすることで洞察できるようにしている。

病棟での実習は8日間で、一人の患者を受け持つ。1日の最後にテーマを定めたカンファレンスを1時間行う。同時期に実習を行う1つのグループは4名から6名で構成される。また、1週目の最後に1日間、デイケアで実習を行う。2週目の実習最終日を学内日とし、教員の指導のもと学生間で学びの共有を行う。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

2017年1月から12月までに精神看護学実習を終え、成績評価も終了したA大学3年生92名のうち、研究への同意が得られ、質問項目のすべてに回答があった66名を対象とした（有効回答率

71.7%)。なお、対象者が実習を行った病棟については、慢性期病棟が25名、急性期病棟が41名であった。

2. 調査方法

学生が精神看護学への関心を向上させ、学びの充実化につなげる指導の在り方を検討するために、以下の2つの研究を実施した。

1) 研究Ⅰ：精神看護学への関心に影響する教員の接し方

各グループの精神看護学実習最終日に質問紙調査を実施した。本研究では、学生が精神看護学への関心に影響する教員の接し方を明らかにすることを目的としているため、学生が教員にどのように接してもらったかという主観性を確認することが重要だと考えた。しかし、本研究の趣旨に適した教員の接し方についての指標はみられなかったため、Zimmerman & Westfall (1988) が作成し、邦訳された実習における教員評価表(石川・森・千葉, 1991)の43項目を、教員の接し方として用いることとした。対象者には、臨地で主に実習を担当された教員一名を想定して「全くそうということではなかった」1点から「いつもそうであった」5点の5段階で回答するよう依頼した。

また、精神看護学実習前を想定し、精神看護学への関心を「なかった」1点から「あった」3点の、実習後の精神看護学への関心を「ない」1点から「ある」3点の3段階で回答するよう依頼した。

2) 研究Ⅱ：学生の学びの現状

精神看護学実習最終日に学生から提出された、実習による学びのレポートを、学生の同意のもと用いた。学びのレポートは、実習体験をもとに具体的なテーマを設定し、2,500字以上で自己の学びを記述したものである。

3. 分析方法

1) 研究Ⅰ：精神看護学への関心に影響する教員の接し方

精神看護学への関心に影響する要因を確認するために、実習前後の精神看護学への関心の差を従

属変数とし、教員の接し方を独立変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った。

なお、統計解析にはIBM SPSS Statistics 24を用い、統計学的有意水準は5%とした。

2) 研究Ⅱ：学生の学びの現状

本研究では、学生一人あたり2,500字以上のレポートといった大量の記述データを系統的、客観的に概観することで学びの現状を把握するためにテキストマイニングの手法を用いることとした。

学びのレポートをもとに、出現頻度の多い語を確認した。テキストマイニングによる共起ネットワーク分析を行い、二次元画像として描画した。出現回数による語の取捨選択は最小出現回数を135に、描画数は60に設定した。描画された図は共起関係が強いほど太い線で、出現回数が多い語ほど大きい円で示される。円の色の濃さは中心性(媒介)を示しており、ネットワーク構造のなかで中心的な役割を果たしている語ほど、濃く示される。なお、分析にはKH Corder 3を用いた。

4. 倫理的配慮

研究の趣旨、研究への同意は自由であること、同意の有無や記入内容は成績には影響せず、いかなる場合も不利益を受けることはないこと、結果は学術集会での発表、または学術雑誌に投稿することで公表することなどについて書面を用いて口頭で説明した。同意が得られた学生の質問紙と学びのレポートを用いた。質問紙と学びのレポートの回収後に、同意を撤回したい場合は研究者または共同研究者に連絡するよう依頼した。連絡先となる研究者は精神看護学領域の教員ではあるが、臨地で主に実習を担当しなかった教員でも受け付けられるようにし、成績評価終了後でも同意を撤回できるようにした。この場合も不利益を受けることはないことを説明した。データの入力時には名前等は削除し、個人の特定ができない状態でデータ化した。分析は個別に行うことはせず、データは本研究以外に用いたことはない。なお、調査は京都橘大学研究倫理委員会の承認後に開始した(審査番号：9)。

IV. 結果

1. 研究Ⅰ：精神看護学への関心に影響する教員の接し方

精神看護学への関心の得点は、実習前が 1.97 ± 0.89 (平均±標準偏差) 点、実習後が 2.61 ± 0.58 点であった。教員の接し方について、ほとんどの項目が4点(そうであった)を超えていたが、「適宜、看護援助を実施して皆さんに示していた」の項目が 3.68 ± 1.11 点と特に低かった。

精神看護学への関心に影響する要因について実習前後の精神看護学への関心の差を従属変数とし、多重共線性の影響を考慮して $r_s > .7$ の強相関がみられた項目を除いた教員の接し方(26項目)を独立変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った。精神看護学への関心に影響する要因として、「皆さんが緊張している時には、リラックスさせるようにしていた」($\beta = 0.53, p < .05$)、「指導者と

の指導方法は統一していた」($\beta = 0.49, p < .05$)、「患者とその患者へのケアに関心を示していた」($\beta = 0.39, p < .05$)が正の、「皆さんのカンファレンスや計画の発表をうまく運営していた」($\beta = -0.69, p < .01$)が負の変数であった(表1)。なお、Variance Inflation Factorが10を超えるような値はなく、多重共線性の問題はなかった。また、標準化残差の正規確率はほぼ直線上に右上がりに並んでいたことから、残差は正規分布に従っていると判断できた。

2. 研究Ⅱ：学生の学びの現状

データの総抽出語数(使用語数)は100,211(35,510)語、異なり語数(使用語数)は3,707(3,143)語であった。

出現回数は〈患者〉が1,174回で最も多く、〈考える〉が752回、〈自分〉が424回、〈関わり〉が

表1 実習前後の精神看護学への関心の差に影響する教員の接し方

(定数)	(平均±標準偏差)	B	標準 誤差	β	t 値	有意 確率
		3.74	0.85		4.39	.00
臨床で皆さんに情報を提供していた (4.56±0.64)		-0.02	0.22	-0.02	-0.08	.93
ケアの実施時には、基本的な原則を確認していた (4.29±0.76)		-0.07	0.12	-0.08	-0.55	.59
皆さんのカンファレンスや計画の発表をうまく運営していた (4.39±0.70)		-0.64	0.18	-0.69	-3.53	.00**
皆さんに対し、正しく冷静な判断で接していた (4.65±0.67)		-0.21	0.22	-0.21	-0.93	.36
皆さんが看護専門職としての責任を理解できるように働きかけていた (4.47±0.61)		0.10	0.23	0.09	0.43	.67
批判ばかりでなく、前向きな態度でカンファレンスや計画の発表を導いていた (4.59±0.86)		-0.18	0.18	-0.24	-1.02	.32
皆さんが緊張している時には、リラックスさせるようにしていた (4.12±1.10)		0.32	0.13	0.53	2.35	.02*
専門的な知識を豊富に持ち、それを皆さんに伝えていた (4.65±0.67)		-0.05	0.20	-0.05	-0.27	.79
皆さん同士で、自由な討論ができるようにしていた (4.56±0.73)		0.11	0.18	0.12	0.62	.54
皆さんが興味を持てるように、教員自らが熱心にケアなどをしていた (4.06±0.93)		0.11	0.15	0.15	0.74	.47
皆さんが気軽に質問できるような雰囲気をつくっていた (4.41±0.93)		-0.09	0.15	-0.13	-0.64	.53
皆さんが実施しやすい範囲・事柄を学習過程に応じて明確にしていた (4.35±0.87)		-0.10	0.15	-0.13	-0.69	.50
看護援助をより良くするために、皆さんに文献を活用するように言っていた (4.08±1.00)		-0.08	0.14	-0.12	-0.57	.57
物事をそれが正しいかも一度考えてみるように言っていた (4.56±0.68)		-0.16	0.17	-0.17	-0.96	.34
理論的な内容や、既習の知識・技術などを実際に適用してみるように働きかけていた (4.44±0.70)		0.10	0.20	0.11	0.52	.60
皆さんに対する要求は無理のない要求であった (4.42±0.82)		0.22	0.20	0.28	1.14	.26
記録物に対し、適切な内容のアドバイスをしていた (4.46±0.72)		0.10	0.20	0.11	0.52	.61
皆さんが新しい体験ができるような機会をつくっていた (4.33±0.85)		-0.10	0.19	-0.13	-0.53	.60
適宜、看護援助を実施して皆さんに示していた (3.68±1.11)		-0.07	0.14	-0.12	-0.53	.60
患者と良い人間関係をとれるようにしていた (4.35±0.79)		0.05	0.15	0.06	0.35	.73
皆さんの言うことを、受けとめてくれた (4.65±0.69)		-0.17	0.28	-0.18	-0.61	.54
看護師と良い人間関係をとれるようにしていた (4.32±0.77)		-0.24	0.18	-0.28	-1.31	.20
指導者との指導方法は統一していた (4.17±0.90)		0.36	0.15	0.49	2.30	.03*
皆さんに対し、忍耐強い態度で接していた (4.45±0.86)		0.14	0.16	0.18	0.87	.39
皆さんがうまくいかなかった時にはそれを認められるように働きかけていた (4.33±0.79)		-0.06	0.19	-0.07	-0.30	.77
患者とその患者へのケアに関心を示していた (4.50±0.69)		0.37	0.16	0.39	2.32	.03*

ANOVA $p < .05$ $R^2 = 0.55$ 調整済み $R^2 = 0.25$ * $p < .05$ ** $p < .01$

317回、〈理解〉が308回の順に多かった。上位20位までの語を表2に示す。

中心性（媒介）は〈生活〉が最も高く、〈症状〉〈精神〉〈考える〉〈入院〉〈学ぶ〉〈患者〉〈理解〉〈思い〉〈自分〉と共起関係にあった（図1）。

表2 学びのレポートで出現回数が多かった語

順位	語	出現回数	順位	語	出現回数
1	患者	1174	11	コミュニケーション	201
2	考える	752	12	幻聴	188
3	自分	424	13	関係	179
4	関わり	317	14	看護	176
5	理解	308	15	状態	176
6	症状	299	16	入院	169
7	思い	298	17	精神	163
8	生活	287	18	妄想	142
9	学ぶ	242	19	感情	141
10	不安	217	20	援助	136

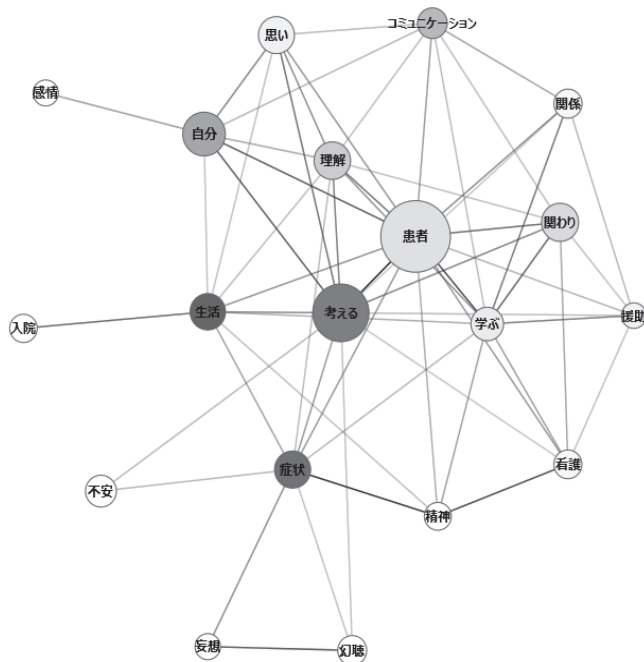


図1 学生の学びの現状（共起ネットワーク図）

また、特に共起関係が強かったのは〈患者〉と〈考える〉〈学ぶ〉〈自分〉、〈精神〉と〈症状〉〈看護〉であった。

V. 考察

実習における教員の接し方について、ほとんどの項目が4点（そうであった）を超えていたが、「適宜、看護援助を実施して皆さんに示していた」の項目は3.68点と最も低かった。これは、精神科では視覚的には確認できない人間の精神的な側面を対象としているため（眞野・山本・吉村, 2013）、学生が教員の患者への関わりを看護援助として捉えきれていない可能性があると考えられた。

本研究では、「緊張している時には、リラックスさせるようにしていた」の項目が正の要因であった。学生は、講義や演習だけでは精神疾患についてのイメージが難しいため、精神疾患への偏見も強く（鈴木・平上・伊礼, 2013）、患者への関わりには強い緊張を伴うことが考えられる。学びのレポートでは〈患者〉〈関わり〉〈学ぶ〉が共起関係にあったことから、教員が学生の緊張を緩和させるように接することは、患者との関係性を早期に発展させるきっかけとなり、患者への関わりについての学びを深めることにつながることが推察された。

「患者とその患者へのケアに関心を示していた」の項目が正の要因であった。精神科では援助者の関わりそのものに治療的側面があり、患者と独自に編み出す看護実践は精神科看護の魅力のひとつであるといわれる（酒井・竹淵・関根, 2013）。これは学生においても同様で、患者と試行錯誤しながら実践するケアに対して、教員が肯定的な関心を示すことは、精神看護学の魅力を感じる機会になり得るのではないかと推察される。学びのレポートでは、〈生活〉の中心性（媒介）が高く、〈患者〉〈精神〉〈症状〉〈思い〉などと共起関係にあり、さらに〈考える〉〈理解〉〈学ぶ〉とも共起関係にあった。これらの結果から、患者の思いや生活、症状との相互の関係性についての学びが得られていることが推察され、患者の生活やライフイベントと病状との関連の理解が深まるという実習による学びの特徴（大森・玉田・上岡, 2008）とも符合している可能性がある。

「指導者との指導方法は統一していた」の項目も

正の要因であった。教員と指導者の指導の共通認識が構築されていないと実習指導がうまくいかず（本郷・平野・後藤・今野・遠田・今井・石井, 2018）、協働のためには実習内容や指導方法を共通理解する必要があるとされることから（滝島, 2012）、本研究結果は符合し、学生が精神看護学への関心を高めていることが考えられた。

「カンファレンスや計画の発表をうまく運営していた」の項目は負の要因であった。A大学では、テーマを定めて1時間のカンファレンスを行っている。精神科においては、患者との関わりを含む実習での出来事を振り返り、意味づけするためにも教員による即時的な指導が重要となる（谷本, 2015）。また、テーマは、学生のカンファレンスへの参加姿勢に関連する重要な鍵となるため（中西・岡田・塩月・原・山口・上杉, 2005）、カンファレンスの準備時に、教員は学生が精神看護学に関する学びが定着するように積極的に関わっている。しかし、教員が関与し過ぎると、学生が主体的に学んだという認識をもつことができず（中西 他, 2005）、学びの実感が得られないこともある（渡邊, 2015）。このことにより、精神看護学への関心を低下させている可能性があることが推察された。

一方、カンファレンスにおいて、学生が気づきをもとに主体的に考察を深める姿勢を修得できるように指導している。そのため、学びのレポートでは〈考える〉の出現頻度が高く、〈患者〉を介して〈考える〉と〈学ぶ〉は共起関係にあったことから、患者への看護について〈考える〉姿勢の修得につながっていることが考えられた。これらのことから、教員が学生に深い考察を促すことで、主体的に学びを深めたという実感を弱める可能性は内在しているが、学生が主体的に考察する姿勢の修得につながるように、状況に合わせた段階的な指導が必要となることが推察された。

VI. 本研究の限界と今後の課題

実習目的や目標は、各大学の教育理念に基づいて設定されていること、実習を行う病院や病棟の特性により経験できる内容が異なる可能性がある

ことなどから、本研究の結果を一般化することはできない。また、学びのレポートを系統的、客観的に概観するためテキストマイニングを分析に用いたが、文章の意味内容や行間を加味することはできていない可能性がある。

精神看護学への関心に影響する要因については、教員の接し方以外にも検討することが今後の課題となる。

VII. 結語

本研究では、学生が精神看護学への関心に影響する実習での教員の接し方と実習による学びの現状を明らかにすることを目的とした。実習前後の精神看護学への関心と実習での教員の接し方に関する質問紙調査を実施し、重回帰分析により分析を行った。また、学びのレポートは、テキストマイニングにより分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

精神看護学への関心に影響する要因として、「皆さんが緊張している時には、リラックスさせるようにしていた」、「指導者との指導方法は統一していた」、「患者とその患者へのケアに関心を示していた」が正の、「皆さんのカンファレンスや計画の発表をうまく運営していた」が負の変数であった。

学びのレポートにおいて、出現頻度が高かった語は、〈患者〉であった。また、〈生活〉の中心性（媒介）が高く、〈患者〉〈精神〉〈症状〉〈思い〉などと共起関係にあり、さらに〈考える〉〈理解〉〈学ぶ〉とも共起関係にあった。

謝辞

本研究にご協力くださった関係者のみなさまに深く感謝申し上げます。

本研究における利益相反は存在しない。

文献

本郷久美子, 平野美理香, 後藤桂子, 今野玲子, 遠田きよみ, 今井恵子, 石井幸(2018). A看護系大学とB実習施設の看護基礎教育における

- 連携を目指して：臨床指導教員と臨床実習指導者の実習指導における成功・うまくいかなかった体験の認識. 三育学院大学紀要, 10(1), 39-50.
- 井上喬太, 西田大介, 平井孝治, 松本賢哉(2017). 精神看護への興味に影響する実習時の臨床指導者のかかわり. 日本精神科看護学術集会誌, 59(2), 191-195.
- 石田隆也(2012). 精神看護学実習前後の看護学生の精神障がい者観と学びの構造. 日本精神科看護学術集会誌, 55(2), 35-39.
- 石川ふみよ, 森千鶴, 千葉恭子(1991). 臨床看護実習における教員評価表の妥当性と指導体制の一考察：学生の教員および看護婦に対する評価. 東京都立医療技術短期大学紀要, (4), 77-90.
- 小坂やす子, 文鐘聲(2011). 精神看護学実習前後における看護学生の精神障がい者に対するイメージの変化. 太成学院大学紀要, 13, 195-201.
- 眞野洋子, 山本智津子, 吉村公一(2013). 精神看護における看護技術研究の傾向と今後の課題. 摂南大学看護学研究, 1(1), 43-50.
- 松枝美智子, 坂田志保路, 宮崎初, 安藤愛, 安永薫梨, 宮野香里(2018). 精神看護学の「経験型実習教育」における「学生の患者ケアへの内発的動機付け」と「学生の観点から見た教授－学習活動」との相関. 福岡県立大学看護学研究紀要, 15, 1-11.
- 松枝美智子, 安永薫梨, 安田妙子, 大見由紀子(2008). 精神看護実習で学生の患者ケアへの内発的動機づけが高まる要因. 福岡県立大学看護学研究紀要, 5(2), 66-79.
- 中西純子, 岡田ルリ子, 塩月ぬい子, 原美香子, 山口利子, 上杉純美(2005). 学生にとって意味のあるカンファレンスとその関連要因. 愛媛県立医療技術大学紀要, 2(1), 21-27.
- 大森眞澄, 玉田明子, 上岡澄子(2008). 一般病院精神科病棟における精神看護学実習での学生の学びの特徴と課題. 島根大学医学部紀要, 31, 15-23.
- 酒井美子, 竹渕由恵, 関根正(2013). 精神科看護の魅力：A 県内の精神科看護師への自由記述式アンケートより. 日本精神科看護学術集会誌, 56(2), 306-310.
- 鈴木啓子, 平上久美子, 伊礼優(2013). 精神障害者への抵抗感の強い学生にとっての精神看護実習の経験. 名桜大学紀要, 18, 57-76.
- 高橋香織, 片岡三佳(2005). 精神看護学臨地実習終了後のレポート分析からみた学び. 岐阜県立看護大学紀要, 6(1), 27-33.
- 滝島紀子(2012). 臨地実習指導における実習指導と教員の協働のための要件：実習指導者の教員に対する要望から. 川崎市立看護短期大学紀要, 17(1), 29-35.
- 谷本千恵(2015). 看護系大学における精神看護学教育の内容と課題. 石川看護雑誌, 12, 85-92.
- 渡邊奈穂(2015). 学生が安心して参加できる場づくりと深い学びを引き出すファシリテーション. 看護教育, 56(11), 1064-1070.
- 渡邊碧, 小高恵実, 原田尚子(2016). 精神看護学実習における実習指導者および教員の認識と教育的支援に関する文献検討. 上智大学総合人間科学部看護学科紀要, 2, 31-43.
- Zimmerman L., Westfall J. (1988). The development and validation of a scale measuring effective clinical teaching behaviors. Journal of Nursing Education, 27 (6), 274-277.

Abstract

Objectives : Purposes investigated in this research included: (i) lecturers' involvement effects for students' interest in psychiatric nursing at the practice; and (ii) the current state of students' learning in psychiatric nursing practice.

Methods : With regard to purpose (i), a questionnaire was evaluated to nursing students (n=66) who had completed psychiatric nursing practice, and lecturers' involvement effects for students' interest in psychiatric nursing at the practice (26 items) was analyzed using multiple regression analysis. As for purpose (ii), the current state of students' learning in psychiatric nursing practice was analyzed according to the post-practice learning report using the text-mining method.

Results : The factor influencing interest in psychiatric nursing, such as “leading to relax when students get tense” ($\beta=0.53$, $p<.05$), “The teaching contents of instructors and lecturers were the same” ($\beta=0.49$, $p<.03$), “Managing conferences, and presenting plans well by lecturers” ($\beta=-0.69$, $p<.01$). Words <patients> were frequently cited in the learning report. <life> with the highest centrality (medium) exhibited a co-occurrence relationship with <patients>, <mental>, <thought>, <thinking>, etc.

Discussion : “Defusing students' tension” leads students and patients to relate better, students are interested in psychiatric nursing and learn effective. “Managing conferences, and presenting plans well by lecturers” may lead to weaken students' feeling “we learned deeply”, however there were a possibility of learning an attitude toward thinking for psychiatric nursing deeply.